



9784101024813



1920195005903

ISBN978-4-10-102481-3

C0195 ¥590E

定価：本体590円(税別)

その伝統、本当に昔からあった？
お正月の定番「初詣」も「重箱お
せち」も、実は私鉄や百貨店のキ
ャンペーンから生まれた新しい文
化。喪服は黒、土下座が謝罪のポ
ーズになったのも実はごく最近。
行事・風習・食生活……日常のい
たるところに潜む、一見それらし
い“昔からのしきたり”や“和の心”
の裏側には、面白エピソードが盛
りたくさん。楽しく学べるベスト
セラーに大幅増補。待望の文庫化。



にほん でんとう しょうたい
「日本の伝統」の正体

新潮文庫

ふ・59・1



令和三年一月二十日発行
令和三年三月二十日三刷

著者 藤井青銅

発行者 佐藤隆信

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二一八七一

東京都新宿区矢来町七一

編集部(03)3366-5440

電話 読者係(03)3366-5111

<https://www.shinchosha.co.jp>

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・三見印刷株式会社 製本・株式会社植本製本所

© Saydo Fujii 2017 Printed in Japan

ISBN978-4-10-102481-3 C0195

この作品は平成二十九年十二月柏書房より刊行された。
文庫化にあたり、大幅な加筆・修正を行った。

- 『冠婚葬祭』宮田登（岩波書店）
- 『増補 良妻賢母主義の教育』深谷昌志（黎明書房）
- 『行人』夏目漱石（新潮社）
- 『唐獅子源氏物語』小林信彦（新潮社）
- 『考証要集 秘伝！ N H K 時代考証資料』大森洋平（文藝春秋）
- 『考証要集 2 蔵出し N H K 時代考証資料』大森洋平（文藝春秋）
- 『日本王権神話と中国南方神話』諏訪春雄（角川書店）
- 『建国神話の社会史 虚偽と史実の境界』古川隆久（中央公論新社）
- 『日本人の神』入門 神道の歴史を読み解く』島田裕巳（講談社）
- 『万葉集の発明』品田悦一（新曜社）
- 『正座と日本人』丁宗鑑（講談社）
- 『惱ましい国語辞典』神永暁（時事通信社）
- 『皇国史観』片山杜秀（文藝春秋）
- 『日本史のツボ』本郷和人（文藝春秋）
- 『誰も調べなかった日本文化史』バオロ・マッツァリーノ（筑摩書房）
- 『ナシヨナリズム その神話と論理』橋川文三（筑摩書房）
- 『唐物の文化史——舶来品からみた日本』河添房江（岩波書店）
- 『東洋一の本』藤井寺銅（小学館）

※その他、参考にさせていただいた多くの学術論文、新聞・雑誌記事は省略いたしました。

主な参考文献

『創られた伝統』 エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編

前川啓治、梶原景昭ほか訳（紀伊國屋書店）

『大相撲の事典』 高橋義孝監修（三省堂）

『武士道を読む』 太田愛人（平凡社）

『ジャパンクールと江戸文化』 奥野卓司（岩波書店）

『日本人のしつけは衰退したか』 広田照幸（講談社）

『鉄道が変えた社寺参詣』 平山昇（交通新聞社）

『日本人のしきたり』 飯倉晴武（青春出版社）

『縁』を結ぶ日本の寺社参り 渡辺憲司監修（青春出版社）

『神々の明治維新』 安丸良夫（岩波書店）

『江戸しぐさの正体』 原田実（星海社）

『創られた「日本の心」神話』 輪島裕介（光文社）

『桜が創った「日本」』 佐藤俊樹（岩波書店）

『昭和芸能史 傑物列伝』 鴨下信一（文藝春秋）

『昭和の藝人 千夜一夜』 矢野誠一（文藝春秋）

『「伝統・文化」のタネあかし』 千本秀樹、長谷川孝、

林公一、田中恵（アドバンテージサーバー）

長く続けてきた「伝統」に何か不都合が生じた場合、「なぜこうしているのか？」とその理由を考えます。考えて、原因がわかれば改善すればいいし、止めた方がいいのです。ところが、「なぜこうしているのか？」への答えが「伝統だから」では、なんだか同じ所をぐるぐる回っているようで、改善の糸口がありません。「伝統」という言葉には、どうやらそういう魔力がある。しかも「伝統を維持する側」だけでなく、「伝統に従う側」もまた、ついその魔力にすがってしまふ。

一般に、人は自分の頭で考えることをやめると、世間とかかわる時、まるで素っ裸で往来に出るようで心細い。そんな時、「權威」「ブランド」「伝統」に頼ります。そういうったものにすがれば、いちおう安心できますから。

だから「これが日本の伝統です」と声高に宣言しているものに乗っかるのは、楽チンなのです。けれど、少しだけ「本当にそうなのか？」と、自分の頭で考えてみるだけで、見えてくる風景はずいぶん変わってきます。

疑問を持ち、自分の頭で考えてみる。それは少しメンドクサイけど、少し楽しい。

なお、源流は古くても、多くの人々が受け入れてから「日本の伝統」となるわけです。その時期はハッキリしません。この本では、信頼できる説を元に「約××年」と判断しました。もし大きく違っている事実があれば、ご教示ください。

藤井青銅

比較的新しい伝統ではそれが見えやすい、というだけのこと。

すべての「伝統」は、始まった時には伝統ではありません。なんらかの必要性や意義があつて続けてきたので、のちに「伝統」になった。だが、年月を経るうちにその意義や必要性が変化し、あるいは消滅し、それとも忘れられ、いつの間にかただ「続けることそのもの」が存在理由になつている「伝統」もあります。

続けるため、時々の風潮に合わせ、けつこく柔軟に（あるいは無節操に）変化している伝統もあります。しかし人は、自分がいま見ている「伝統」が開始当時から不変のまま続いてきた——と思いがちです。

また、「伝統」という看板を掲げてはいるけれど、その実態は「権益、権威の維持と保護」にすぎないケースもあります——ミもフタもない言い方ではありますが。

「伝統があつて、人間がある」のではなく、「人間があつて、伝統がある」。人は伝統の下僕ではありません。ですから、「伝統だから大切にしよう」はいいのですが、「伝統だから従わなければならない」というのは、おかしい話。しかもその伝統が、実はごく近い過去に創られていたとしたら……。

しよせんは過去の自分たちが創った「伝統」に縛られて、のちの世の人間が身動きできなくなつてしまふとしたら、こんなに滑稽こっけいなことはありません。

あとがき 「これが日本の伝統」に乗っかるのは、楽チンだ

もちろん、この本にあげたものの以外に、かなり古くから続いている「日本の伝統」もたくさんあります。それらは、わざわざ取り上げていないだけです。

この本は「伝統」そのものを否定しているわけではありません。さらに言えば、長く続いているから素晴らしく、短いから価値がないというつもりもありません。ただ、「たかだか百〇百五十年程度で、『日本の伝統』を誇らしげに（ときに權威的に）名乗る」というケースに違和感がある、というだけです。

もともと「百年」を長いと見るか短いと見るかは、人それぞれでしょう。人間は、せいぜい生きても百歳。ということは、自分の人生以上の歴史と、その時代を生きてきたご先祖たちに思いを馳せることができるか——ということ。いわば、人それぞれの「歴史への射程距離」によって、違ってくるのでしょうか。

どんなに歴史ある伝統でも、いつの時代かに、どこかで、誰かが創つくったものです。

落語(古典落語という言葉ができて)

洗濯板(日本に入ってきて)

アロハシャツ(日本の生地を使って)

東洋

重箱のおせち

東京招魂社(靖国神社)

マトリョーシカ(ロシアに伝わって)

丸かぶり寿司(恵方巻)

都をどり

夫婦同姓・別姓(再び同姓になって)

蚊取り線香(渦巻き蚊取り線香になって)

演歌(日本人の心の歌と言われて)

榎原神宮

時代祭

平安神宮

神前結婚

告別式

黒い喪服

肉じゃが(東郷平八郎ルーツ説ができて)

白菜

箱根駅伝(日本テレビ中継から)

木彫りの熊

万願寺とうがらし

ソーラン節

よさこい祭り

江戸しぐさ

明治維新

江戸時代

戦国時代

室町時代

鎌倉時代

平安時代

一目でわかる 「伝統の長さ」 棒グラフ

本書で取り上げた「伝統」から、主要なものを掲載。
グラフ中の黒い部分は、その「伝統」がカッコ内の、
「今ある形」になってからの期間を表す。